特集1

「環境政策手法とエネルギー政策」セッション

「ディスカッション」

○**諸富**　私の方から，少し設問をさせて頂くということになるわけですが，寺西先生から植田先生の学問を総括していただいたので，これについては，これ以上語る必要はないくらいですが，あえてセッションテーマに関連してお話を伺わせて頂きます．

せっかく環境政策手法とエネルギー政策ということでもありますので，もう１回，エネルギーの方に戻しますと，やはり私達がこれから直面する，パリ協定後の温室効果ガスの非常にドラスチックな削減をしていかないといけないという世界に来ているわけですね．他方で，福島第一原発事故以降の，原発依存の低減ということを考えているわけですね．これが日本人にとっての挑戦的課題になっているということになります．

いみじくも，高村先生が触れられましたように，やはり，福島原発事故の前ですけれども，温暖化問題や温暖化対策について，非常に熱心に議論をしていたときに，原発の問題を，私たちは確かに正面から捉えて議論していなかったということを，じくじたる思いであるというようにおっしゃったのですが，まったく私も同感であります．

例えば，鳩山政権のときに，温室効果ガスを25％削減ということを掲げて，それ自体はよかったと思うんですけれども，反面，裏では，原発の大増設が予定をされていたということは確かにありました．

やはり私たちのこれからの難しい課題としましては，どうやって化石燃料依存を脱却しつつ，しかし他方で，原発依存を低減しながら，非常に狭いパスですが，原発と化石燃料の両方への依存を下げていくことを可能にするのか，という問題があります．

この先にどういうエネルギー社会を構築していけばいいのか．これは非常に狭いパスですよね．どうやってくぐり抜けていけばいいのかという，非常に重い課題を背負っているわけで，この問題を植田先生はまさに解こうと，全力を尽くされていたんだなと思っております．

先生方の，それぞれの問題に引き付けてで結構です．ストレートにお答えいただいても構いませんし，ご自身の，例えば，浜本先生でしたら，イノベーションに引き込んでのお話でも構いません．我々が直面するチャレンジングな課題について，どう対処していけばよいのか，それぞれお話をいただきたいと思います．

よろしくお願い致します．

○**浜本**　経済学者にとっては，温暖化対策のメインに来るべきは，炭素価格を設定することだという点は，間違いないことだと思います．ただ，例えば，２度目標を達成することを目的として，炭素税や排出権取引の導入に

よって炭素価格を設定するとなれば，非常に高い税率なり，炭素価格を設定しなければならなくなるので，結果として，それは社会的に受け入れられないということになってしまう．炭素税が非常に評判が悪いのは，その点にあるわけです．いま，化石燃料の大量消費を前提とした技術や社会の仕組みになっているわけですが，それをよりクリーンな，低炭素型の社会にしていくということが必要になります．それを炭素価格の設定だけで進めるのではなくて，例えば，私の関心領域だと技術政策ということになるのですが，先ほどの環境政策統合ということにも関係してくるかもしれませんけれども，ある程度，技術政策を用いて，既存の技術体系から，クリーナー・プロダクションなり，低炭素型の技術に転換していって，ある程度転換が進んだところで，炭素価格を設定する．そうすると，それほど高い価格でなくても済むということで，社会的にも受け入れられやすいということになるのではないか．そういったかたちで，中長期的な展望を描きながら，環境政策と，例えば，技術政策とを組み合わせていくといったことも考えていく必要があるのではないかと思います．

○高村　ありがとうございます．なかなか報告の中で申し上げ切れなかったところもあるんですけれども．

ちょうどいま諸富先生ともご一緒している環境省の長期低炭素ビジョンの委員会でも，環境省のその委員会でまとめている方向というのは，パリ協定の2度，あるいは，できれば，1・5度という長期の目標を達成するために，2050年，日本は80％というのを，もう政府は閣議決定しております．

そのときに，日本の姿としては，低炭素エネルギー，これは再エネ，原子力，そして，炭素回収貯留技術（Carbon Capture and Storage）を使った火力発電所を含めて9割，低炭素電源にしないといけないという文言が入っています．

まだ議論の余地が委員会の中でもありますけれども，IPCC自身も2度目標というのを達成するときに，2050年，80％以上は低炭素電源にする必要があると言っていますので，ほぼそれに呼応したものです．

そのときに，やはりいくつか課題があると思っておりますのが，一つは，先ほど言いました，再生可能エネルギーの，日本のコストをどのようにしていくかという点です．専門家がたくさんいらっしゃるんですけれども，欧州などではもう昨年ぐらいから，高いと言われていた洋上風力で6円，6円を切るような，1kw/h当たりの，洋上風力の発電コストが下がってきていまして，やはり日本の再生可能エネルギーのコスト高というのを，きちんと解明をして，どのような対応が必要かということを議論する必要があると思っています．それが一つです．

二つ目は，先ほど少しお話をしました，系統の問題です．

三つ目は，先ほど，浜本さんがおっしゃいました，やはり再エネは高いと言ったときに，いわゆる電源の選択としてはコスト，これは，植田先生が大変こだわっていらしたところだと思うんですけれども，電源のコストをどのように評価をするのか，どのように計算するのかという点は，ぜひ経済学者の方にお願いをしたいというところであります．それは同時に，カーボンプライス，炭素の価格をどう

評価するかというところにも関わってまいります．

私は，先ほど80％の低炭素電源，あるいは，90％という話をしましたが，世界的に見ると，それに呼応するような速度で，いまガス，そして，再生可能エネルギーへのエネルギーの転換が起こっているように思います．先ほど言いましたが，政策によるのではなくて，コストが安いからという市場の選択によって，それが進んでいるとうことなんですね．

そういう意味で，コストを下げるというのが一つの課題ですが，もう一つは，やはりそれをきちんと投資，お金の流れができる制度環境をつくっていくというのが，大きな課題だろうと思います．

これは，寺西先生が植田先生の一つの大きな関心は，やっぱり制度だったとおっしゃいましたが，たぶん私たち法律の人間と会話が非常にやりやすかったと言いましょうか，会話がスムーズに行ったのは，おそらく先生の制度，現実の場面でそれが使われるようにするというところ，仕組みをどうするかというところにあった，先生のご関心と合っていたからかなと思っています．

経済学者にお願いすることは，たくさんあるのですが，私自身の課題としても，どのような制度をつくっていくかということは位置付けていきたいなと思っております．以上です．

○**寺西**　どういう話をすればいいんでしたっけ．何でもいいんでしたっけ．

○**高村**　何でも．

○**寺西**　追加的発言をすればいいですか．

先ほどはすみません．どうもちょっとね，私は，何となくいろいろな思いがこみ上げてくるという場面はあまりないんですけど，なぜかちょっと今日は，すごくいろいろなことを思い起こしてしまって，何と言いますか，あまり明快な話ができなくて申し訳ありません．

先ほど，実はちょっと言おうと思っていたことの中で，『廃棄物とリサイクルの経済学』が彼の最初の作だとすれば，最近著で，単著でまとめられたのが『緑のエネルギー原論』です．

これは，原発事故後の，いろいろな彼の研究活動，あるいは社会的，あるいは審議会その他の，いろいろな場で発言されたものを，改めて１冊にまとめたものです．私は，学会誌の中でも書評を頼まれて書いたのですが，非常に私の心に残ったのは，この「序」の一節です．

「福島原発事故は，私個人にとっても衝撃的な出来事であった．大げさな言い方かもしれないが，研究者としての人生設計を考え直す契機となった．環境経済学者としての，自分のこれまでの研究が福島原発事故によって鋭く問い直された」という書き方をしているんですね．私は，この福島原発事故が突き付けた問題に答えを出さない限りは，自分の研究は完結しないとまで言い切っています．

おそらく復帰されたら，いろいろな課題が山積している中でも，彼が今後の研究として，一番答えを出すために格闘しようという中心に座らせる問題は，おそらく福島原発事故後の対応はいかにあるべきかという問題だと思うんですね．それは二つあるんですね．

一つは，事故の後始末をどうするかという問題が残っていますね．これは，誰も回答を出せていません．

もう一つは，仮に今後事故がなくて，幸いずっと安全な再稼働が進んだとしても，原発自身は，植田さんがいつも言及していましたが，A.V. クネーゼという人の書いた『ファウスト的取引』にあるように，原発技術それ自身が致命的な高レベル廃棄物を出し続ける技術なんですね．これの処理，廃棄という問題では何ら展望がないわけです．

植田さんが，廃棄物と経済学の出発点をつくられたとすれば，最後に彼が答えなければならないとすれば，原発技術によって出てきた廃棄物をどうやって処理するのか．つまり，廃棄物問題の最終大難問が原発事故後のわれわれに突き付けられたテーマです．これは，国際的にもいまドイツを見ても，あるいは北欧諸国，フィンランド，その他を見ても，説得的な回答がないですね．これにやはり，たぶん植田さんはチャレンジしようとされていたと思いますし，これから復帰されたら，まず取り上げるのはこれではないかと思います．

私自身も，もともとは公害の問題，それ自身が廃棄物のもたらす環境被害ですから，植田さんと問題意識を共有していました．ですから，私自身もいまこの大難問を，私の場合は，カップの提起した社会的費用という観点から，どうやってこれを制御できるのかの具体的政策というような議論を学術的にやらなければいけないという思いを，非常に強めていますけれども，残念ながら私の力及ばずです．

植田さんにもう一度やっぱり復帰して，知恵を貸していただきたい．おそらく植田さんというのは，非常に厳しい難関，難問，これを案外，彼は全てポジティブシンキングですから，「何とかなるよ，寺西さん．これは簡単や，こうすりゃいいんや」と，ヒントを出していただけるのではないかという期待があります．

そういう意味でも，最後のエネルギーセッションで突き付けられている原発とどう向き合うか．この事故とどう向き合うか．そして，いまなお深刻な事故の後始末問題が何ら回答が出ていない，この事態に植田さんがどう取り組まれようとしていたか．これを私たちは引き継ぎたい．あるいは共に，復帰していただいて，一緒に考えたいということを申し上げたいと思います．

ちょっと全然趣旨に合わない発言かもしれません．

○諸富　素晴らしいまとめでありがとうございます．

私が最後に，実はお聞きしたかったことを，もうすでに寺西先生にお答えいただきました．

このセッションは15分までを予定していたのですが，皆さん，プログラムをご存じのとおり，この後，いったんセッションを閉じた後に，宮本憲一先生と池上惇先生にお話しいただきます．セッションの時間が少し短めだったので，両先生には少し長めの時間をお渡ししたいと思っていまして，10分で切りたいと思います．

ということで，あと1，2分で，最後に，植田先生の学問を受けまして，それぞれのご研究を今後どう発展させるかという点について，1，2分で申し訳ないですが，最後のメッセージをそれぞれお話しいただけますでしょうか．

それで，10分で終わりたいと思います．

よろしくお願い致します.

○**浜本**　私は，先ほど，いかに個別の事例の調査からさまざまな事を学ぶか，ということを申し上げましたが，実は最近，自分自身，これができていないと，非常に強く反省しているところです．やはり今後の自分の研究については，植田先生から学んだことの原点に返って，いろいろな環境政策の現場であるとか個別事例を，とにかくつぶさに見ていって，そこから学んだことを実証研究に生かしたり，理論研究に生かしたりするということを，またきちんとやっていきたいと考えています.

○**高村**　ここに植田先生のお弟子さんを含めて，多くの教えを受けた皆さんがいらっしゃると思います．ぜひエネルギー政策の分野にいらしてください．原子力の話も寺西先生からありましたけども，再生可能エネルギーも含めて，非常に多くの政策課題がございます.

経済学の助けなしにはできない政策形成，その制度をつくっていくことができない状況にございますので，ぜひ自らのご研究を現実の制度をつくるところにお力添えをいただきたいと思います.

そこには，おそらく学際的な取り組みが必要で，私どももそういう経済学者，財政学者の方と一緒に歩みを進めていきたいと，自分も含めて思っております．以上です.

○**寺西**　最後に，これはたぶん私しかこういうことを言えないと思うので，あえて言わせていただきます.

私の大学院を出て研究者になったのは，だいたい20，30人ぐらいいるんですね．なかなかピンからキリといろいろありますけど，植田さんのところは，たぶん私のところの2倍から3倍の研究者軍団を送り出したと思います．あるいは，送り出しているのではないかと思います．そのうちの10人くらいが今日プレゼンをされました.

ぜひ植田先生が，これは大事だよ，こういう方向と，彼の指示されたことを受け止めて，それぞれ発展させて，個別研究としては非常に深く，先端的な研究をされているのはよく分かりました.

しかし，それだけでは植田さんの業績を，門下生の皆さんが引き継ぐことにならないと思います．なぜか．植田さんはものすごい学際性があって，しかも，先ほどちょっと言いましたように，非常に重要なテーマについて現場へ行き，研究者集団をオーガナイズして，研究をプロジェクト化する．そういうオーガナイザーとしての植田さんというのは，すごく貴重なんですね.

ぜひそういうところを，次の植田門下生の中から，諸富さんはもうすでにやっておられるのですが，諸富さんに続いて，次々と，今日登壇いただいた方に研究オーガナイザーとして，そして，いま日本が直面しているいろいろな問題を，環境問題に限りません，本当に難問ばかりですね．それぞれのテーマ，問題について，現場に足をつけて，政策論をきっちりと展開する．そういう研究集団としての大きな力を，ぜひ発揮していただきたい.

そこに私のところから出た人たちも，できれば連携して協力していく．そういう東西の連携体制で日本を，何と言いますか，救いましょうと言いましょうか，日本の新しい時代を築く，そういう時代にしてほしいと思います.

そういうことをちょっと念願させていただ

いて，全然趣旨に合わない発言で申し訳ございませんが，最後に一言.

○**諸富**　どうもありがとうございました.

寺西先生に，むしろ最高のプレゼンテーションをいただいたと思います．本当に，植田門下だけじゃないですけど，植田先生のために寺西先生に来ていただいて，お招きして本当によかったと思います．どうもありがとうございます.

これにて，3名のプレゼンテーションをしていただいた先生方に感謝申し上げたいと思います．拍手でもって感謝申し上げたいと思います.